

## <はじめに>

### 1 総合的な学習の時間のこれまでの研究

小・中学校では、平成14年度から総合的な学習の時間が実施されている。高等学校では、来年度から本格実施となる。

小・中学校の試行期間における取組を見てみると、「児童生徒が、一生懸命に活動しているが、そこでどのような力が育っているのか分からない」「児童生徒一人一人のよさをどのように評価すればいいのか分からない」「単元計画は立てたが、修正・変更がたくさん出てきた」など、評価に関する切実な課題が生じてきた。また、高等学校においても、「特別活動との違いはどこにあるのか」「総合的な学習の時間を計画しなくては行けないが、どういうところに留意して立ち上げればよいか」「何をどう評価していいか分からない」など、同様な課題が生まれてきた。

総合的な学習の時間の評価について、教育課程審議会から出された「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」<sup>(1)</sup>では、次のように述べている。

- この時間の学習活動の展開に当たっては、学習指導要領に示された二つのねらいなどを踏まえ、各学校において具体的な目標、内容を定めて指導を行うことが必要である。そして、その目標、内容に基づき、観点を定めて評価を行うことが必要である。
- また「総合的な学習の時間」は、横断的・総合的な課題などについて、体験的な学習、問題解決的な学習を取り入れ、各教科等で身に付けた知識や技能を相互に関連付け、総合的に働かせることをねらいとしており、それを通じて、自ら学び、自ら考える力や学び方、ものの考え方などの確かな育成に資するよう、評価に当たっては、各教科の学習の評価と同様、観点別学習状況の評価を基本とすることが必要である。（下線は本研究委員会による）

本教育センターでは、上述の課題や答申を受け、昨年度から総合的な学習の時間の評価に関する研究を行っている。

昨年度、小・中学校研究委員会では、総合的な学習の時間の評価の観点及び評価規準の作成の仕方や留意点を示すことができた。さらに、目標の設定から評価の観点、評価規準等を活動案に位置付けるまでの一連の過程を授業実践を通して具体的に示すことができた。高等学校研究委員会では、評価の観点や評価規準及び評価の資料を集める方策を示すことができた。また、生徒が身に付けた力を評価する方法として、観察法、面接法、ポートフォリオを取り上げ、その考え方や手順についても示すことができた。

これを受けて本年度は、総合的な学習の時間の単元や学習活動での評価を基に、年間の指導計画や目標・内容など、この時間のカリキュラム全体を見直していくという、カリキュラム評価の具体的な考え方・進め方を明らかにすることをねらいとして取り組むことにした。本研究委員会において提案したカリキュラム評価の考え方や方法の有効性を確認するために、佐賀市立鍋島小学校、伊万里市立大川内小学校、武雄市立武雄中学校、諸富町立諸富中学校、佐賀県立鹿島高等学校、佐賀県立高志館高等学校において実践していただいた。

小・中学校、高等学校におけるカリキュラム改善の必要性やカリキュラムのサイクルに対する基本的な考え方については以下に示すが、小・中学校と高等学校ではねらいの重点の置き方や実施の時期等が若干異なるため、評価の進め方や改善方法については、小・中学校研究委員会と高等学校研究委員会に分かれ研究に取り組むことにした。なお、昨年度までの3か年の研究については、本教育センター研究紀要第24集別冊、第25集別冊、第26集を参照していただきたい。

## 2 カリキュラム評価の必要性

学校のカリキュラムなどの自己点検、自己評価の重要性について、前述の「答申」<sup>(2)</sup>では次のように述べられている。

各学校が、適切な教育課程を編成・実施した上で、児童生徒の学習状況や教育課程の実施状況等について自己点検・自己評価を適切に行い、それに基づき、学校の教育課程や指導計画、指導方法等について、絶えず見直しを行い改善を図ることは、学校の責務であり、極めて重要な課題である。各学校が自己点検・自己評価を行うことは、学校の自主性・自律性の確立と学校の経営責任の明確化にも資するものである。（下線は本研究委員会による）

総合的な学習の時間も、学校の教育課程の一部であり、当然見直しを行い、改善を図らなければならない。さらに、他の教科等と異なって、目標・内容、評価の観点や評価規準の設定、単元開発など、この時間のカリキュラム作成については、各学校の独自性が求められている。このことは、各学校が、児童生徒や地域の実態などを踏まえた総合的な学習の時間のカリキュラムを作成し（計画カリキュラム）実践するだけでなく、実践された結果（実施カリキュラム）を基に、単元や評価規準、目標・内容等までを見直し、カリキュラムの改善を行い、毎年更新しながら学校独自のカリキュラムを創り上げていくことを意味している。

## 3 カリキュラム評価の基本的考え方

総合的な学習の時間のカリキュラム評価の考え方については、天野正輝が、その著書『カリキュラムと教育評価』にて述べていることを参考にした。<sup>(3)</sup>

カリキュラム評価（curriculum evaluation）とは、一般に、学校の教育目標を効果的に達成するためにカリキュラムの編成と実施が適切に行われたかどうかを確かめ、改善の方策を立てることである。

カリキュラムの編成には、一般に、次のような関係が成立しており、個々の授業実践はこの過程に基づいているのである。

「学校教育目標の設定      カリキュラムの立案（全体の計画）      年間指導計画（各領域ごと、各学年ごと）      単元計画      指導案      実践」

カリキュラムの編成の過程は、計画・立案（仮説づくり）を含めてその実践に基づく絶えざる再構成の過程である。一たび立案・構成されたらそれで完了というものではなく、つねにその妥当性が実践的に吟味され調整されていかねばならないものである。

天野が言うカリキュラム評価の考え方を、総合的な学習の時間のカリキュラム評価にも取り入れることにした。なお、小・中学校研究委員会、高等学校研究委員会ともに学校のカリキュラム全体を対象にするのではなく、総合的な学習の時間のカリキュラム（総合的な学習の時間の目標・内容から、単元計画、指導案、実践まで）に限定して研究を行っている。また、総合的な学習の時間のカリキュラム評価を進めるに当たって、計画・立案（Plan） 実施（Do） 評価・点検（See） 改善の検討（Improvement）といったPDSIサイクルでとらえ、繰り返し取り組んでいくことが大切であると考えた。さらに、この時間のカリキュラムの評価・点検を行う際には、具体的な評価項目を示すことが重要であると考え、小・中学校、高等学校の各研究委員会において、それを示している。